

テーマ「身に付けさせたい力を、小中高で具体的にどう教える（育む）か」

1) チーム名 後でしょ!!

2) 身に付けさせたい力とその定義

「いまを認める力」

少数のエリートとは別に、社会は多数の「普通」の人々が支えている。それぞれがそれぞれの「納得した人生」を幸せとして感じられる生き方を尊重したい。そのためには、「いま」何をすべきか、「いま」だけではなく「後で」始めることがあっても良い。どちらであっても、「いま」自分が何を模索し、どの様な力を持ち、何が足りないのかをしっかりと認めることが大切である。

3) 小中高でどう教える（育む）かの「具体的方法」

児童・生徒を認める（見る）ことである。認めることにより、褒める、叱る、支える、自立させるタイミングや方法を見出すことができる。上手く進んでいる場合には、支援としての負荷を与え、そうでない場合は「話を聞く」、受容する支援を行う必要がある。

4) その方法を実行するための条件（何が必要か）

教師にとって、時間と気持ちの余裕を確保することが必要である。小中高、どの校種でも教師の多忙が存在する。それだけ、社会が学校に期待することが多いのであるが、児童・生徒と向き合う時間が段々と少なくなっている。校務の ICT 化により生まれた時間を、より多くの課題が埋めていく。教員数を増員するといった物理的な対応は、財政的に厳しい現状である。しかし、これから身に付けなければならない「力」が多い児童・生徒に対応するためにも、多忙化の解消が必要である。

5) われわれが明日からすべき初めの一步

目の前にいる児童・生徒の今と、未来である 50 年先、100 年先の社会を見据える、視野が求められる。これからの社会がどの様に変容するのかを考え、そのために「生き抜く力」を身に付けて欲しいという気概を持つことにより、更なる目的、厚みが深みとなって指導に活かされる。社会の変容を捉え、備える力を身に付けることが求められる。同時に、「待つ力」も強くしなければならない。社会の変容に、付いていくことのできない児童・生徒に、「後で」役立つような支援を忘れてはならない。

6) 先生ご自身の感想やご意見

小中高と、抱いている課題が共通したものであり、接続を考える上で、異なる校種の先生方との情報・意見の交換が必要であることが確認できた。12 年の接続の範囲でしか捉えていなかった私にとって、いかに「井の中の蛙」であったかを身を持って知ることとなった。これからの社会を生き抜くために、今のままの教育制度や内容で良いのか、それは何故なのかを考えると、学校改革、授業の改善などが実にミクロなものであることを痛感した。社会が大きく変容していく予測を直視した瞬間は、正直、希望よりも絶望が上回っていた。しかし、この中で、教師として自分ができることは何か、学校でなければ提供できないことは何かを考えることによって、教育の可能性や果たすべき役割はまだまだ大きいことに気が付くことができた。

12 年の接続という観点では無く、12 年で何を、どの様に育むかという観点を持つ必要がある。抱いている課題が共通したものであったにも関わらず、「では、どういった現状なのか。」、「どの様に対応しているのか。」、「何を、相互の学校種に期待しているのか。」に関してはあまりにも不干涉であった。同じ課題を持ちながら、育むための方法が異なると言うのは、児童・生徒の側にとっても不自然であるし、非効率でもある。地域性、学力層などの違いを尊重した上で、だいたい同じ教育の方向性を語る事が大切だと思う。

今回、参加させていただき有難うございました。是非また参加したいと思います。